

## 舞の動作構成から見た因幡麒麟獅子の“類縁”関係の推定の試み

天野裕章<sup>1</sup>・小林朋道<sup>2</sup>

<sup>1</sup>〒682-0434 鳥取県倉吉市関金町野添359

<sup>2</sup>〒689-1111 鳥取市若葉台北1-1-1 鳥取環境大学環境情報学部環境政策学科

<sup>2</sup>E-mail: t-kobaya@kankyuu-u.ac.jp

[受領 Received 14 January 2006 / 受理 Accepted 10 February 2006]

A preliminary report on study of “kin” relationships among the Inaba Kirin-jishi-mai dances by analysis of composition of behavior patterns of the dances

Hiroaki AMANO<sup>1</sup> and Tomomichi KOBAYASHI<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Sekigane-cho Nozoe 359, Kurayoshi-shi, Tottori, 682-0434 Japan

<sup>2</sup> Department of Environmental Policy and Management, Faculty of Environment and Information Studies, Tottori University of Environmental Studies, Wakabadai-kita 1-1-1, Tottori, 689-1111 Japan

**要旨：**麒麟獅子舞は鳥取県東部を中心として見られる因幡地方独自の獅子舞である。主に野津による研究から、麒麟獅子舞は1650年代、鳥取藩主池田光仲により創始され、その後、350年程の間に、舞のパターンを少しずつ変化させながら鳥取東部を中心に広がったと考えられている。麒麟獅子舞を含め、人間が作り出し伝承していく有形無形の作品を一般的には文化とよぶが、近年、文化の変化の中に普遍的な原理を見出そうとする試みが、特に自然科学の分野で活発になっている。今回、鳥取県東部の24地域および北海道の1地域の麒麟獅子舞について、舞パターンの中から46の要素動作を抽出し、各々の舞を、要素動作の種類と頻度によって定量的に表現し、舞同士を比較する試みを行った。まだ分析量が少ないこともあり、今回の試みの学術的な評価は今後の進展をまたなければならぬが、北海道麒麟獅子舞の起源やその舞構造に心理的要素が与える影響などについて興味深い知見も得られた。

**キーワード：**麒麟獅子舞、動作構成、類縁関係、文化、鳥取県

**Abstract:** The Kirin-jishi-mai dance is a original ceremonial dance of Inaba area (the east of Tottori prefecture) which is performed in folk festivals and some other events. According to studies of Notsu, Kirin-jishi-mai dance was founded about 350 years ago by the lord of the domain of Inaba, and has spread in the past about 300 years with repetition of minor change of the dance structure. The products created by humans and passed through generations, like Kirin-jishi-mai dance, are generally called “culture”. Recently studies which try to clarify some principle in changes of cultures have increased especially in the field of natural sciences. In the present preliminary study, we analyzed the composition of behavior pattern of 25 schools of Kirin-jishi-mai dances quantitatively by extracting 45 unit-movements and calculating frequencies of the unit-movements in the dances. We, then, presumed “kin” relationships among 25 Kirin-jishi-mai dances by comparing the quantitative data. One of interesting results is great similarity of the composition of behavior pattern between Kirin-jishi-mai dances of Hijiri and Kushihiro which are places very distant from each other. It suggests that the Kushihiro Kirin-jishi-mai dances came down directly from Hijiri one through emigrants to Hokkaido from Tottori, and that human minds play an important role in change of the dance structure. The present attempt shows the possibility that the quantitative analysis of Kirin-jishi-mai dances with method of evolutionary biology may give some help to deeper understanding of the dances.

**Keywords:** Kirin-jishi-mai dances, behavior pattern, phylogeny, culture

## はじめに

麒麟獅子舞は鳥取県東部を中心として見られる因幡地方独自の獅子舞である(図1)。これまでの、主に野津(1990, 1991, 2002a)による研究から、因幡の麒麟獅子舞の歴史については次のような内容が定説となりつつある。

「慶安3年(1650)、因幡の国の藩主池田家の初代光仲が、鳥取の樗谿に徳川家康の御神霊を祀る東照宮を建立し、承応元年(1652)、その祭礼行列にはじめて「麒麟」を頭につけた麒麟獅子舞を創始した」(野津2002b)。

その後、350年ほどの間に、麒麟獅子はその形態や舞のパターンを少しずつ変化させながら、鳥取県東部を中心に広がり、2001年時点で、鳥取県東部に149頭、兵庫県北西部に14頭、北海道に2頭が確認されている(野津2002b)。

創始された麒麟獅子舞の動作やその構成は、おそらく、動物の動作に関する知識や美的感覚、アピール性、儀礼一般に共通するルール等々、人間の思考や創造性が入り混じって作られた、いわゆる文化的な作品と言える。そのような作品は、われわれを取り巻く世界の中には満ち溢れており、たとえば、日本では、茶道から兜のデザイン(小林1999)、相撲の様式、「不幸の手紙」等々、われわれの生活にさまざまな影響を与えている。

これらの文化的作品について「理解を深める」という作業の中心には、具体的には次のような内容が含まれると思われる。「その作品の原型はどのようにして、また、なぜそのような構成になり、その後どのようにして、またなぜそのような変化を遂げていったのか」を追求する。」

文化的作品についての学術研究の多くはこれまで、このような理解のために人文的分野の手法で行われてきたが、近年、自然科学的手法による研究も現れて



図1 白兎神社(鳥取市白兎)の麒麟獅子舞  
(図2のCの要素動作を行っているところ)

きた。その手法の一つは、文化的作品の構成要素を定量的に比較分析するやり方である。たとえば、茶道の場合であれば、「茶巾で茶碗を拭う」、「爪の甲をたたみにつけて礼をする」といった所作の動作要素を抽出し、現在さまざまに分岐している

各流派の間で、それらの所作の相同性を求めたり、近隣結合法による系統樹を描くといった手法である(眞岡2004)。このような解析手法には、生物体の進化理論をそのまま適用した系統解析が用いられることも多い。

現在、文化的作品に対する自然科学的手法の適用がどの程度有効であるかは、議論の途上であるが、その大きな有効性を示唆する事例も増えている(Barbrook et al. 1998, Bennett et al. 2003)。

今回、著者らは、因幡麒麟獅子舞について、主に、いくつかの因幡麒麟獅子舞の“類縁”関係の推定について、自然科学的手法の可能性を探る試みを行ったので報告する。

## 方法

### 1. 資料の収集

2003年から2004年にかけて、鳥取県内23ヶ所および北海道1ヶ所の麒麟獅子をビデオで撮影した。撮影した舞は、鳥取県内では、宇倍神社、聖神社、稲葉神社、芦津神社、樋口神社、賀露神社、湖山神社、百谷神社、服部神社、片山神社、甘露神社、熊野神社、網代神社、袋河原神社、椎谷神社、山上神社、小畑神社、多加牟久神社、智頭農林高等学校、都波只知上神社、那岐神社、売沼神社、濱坂神社の舞、北海道では、釧路鳥取神社の舞であった。智頭農林高等学校の舞を除いては、神社での本舞を撮影し、智頭農林高等学校については、第17回国民文化祭・とっとり2002アジア獅子舞大会での舞を撮影した。

### 2. 舞の分析

今回の試行では、舞の構造の中の、以下の一局面についてのみ分析がなされた。まず、各々の神社等の舞について、撮影された映像を繰り返し再生し、舞全の中から1つの単位として設定できる要素動作を抽出・分類し(たとえば、A, B, C, D・・・), 各要素動作のつながりとして舞全体を記号的に表記した(たとえば、AABAABBCCBCC・・・)。次に、舞全体の中で出現した各要素動作の回数を数え、すべての種類の要素動作の総数で割り、各要素動作の出現頻度(%)を求めた(たとえば、Aの動作頻度=(Aの動作回数)/(Aの動作回数+Bの動作回数+Cの動作回数+・・・)×100)。さらに、各要素動作の頻度を試料として、SPSS Base 11.0J 解析ソフトにより、それぞれの神社等の舞の間の相関度の推定(進化系統分析における相同性に対応)、およびそれらに基づくクラスター分析(進化系統分析における系統樹作成に対応)を行った。

## 結果および考察

## 1. 舞の要素動作

今回撮影した神社等の麒麟獅子舞に関しては、あわせて46の要素動作を抽出した(図2)。各々の要素動作の簡単な説明を以下に記す。

A, B: 左右に跳ぶ動作。Aは右に、Bは左に跳ぶ。  
C, D: 頭を180度回転させるようにして上方に上げる。

E, F: 頭を上から回転させながら下ろす。Eは右側、Fは左側に。

G, H: 頭を水平に移動させる。Gは左側に、Hは右側に。

I, J: 左足を上げる。Iは右足を、Hは左足を。

K, L: 上がっている足を下ろす。Kは右足を、Lは左足を。

M: 体を前後左右に揺らしながら前進する。

N, O: 体の方向を変える。Nは左側へ。Oは右側へ。

P: 頭を、下ろした状態から垂直上方へ上げる。

Q: 頭を、上げた状態から垂直に下ろす。

R: 頭を素早く捻るように回転させる。

S, T: 頭を下ろした状態で回転させる。Sは右側に、Tは左側に。

U: 頭を一旦後方に引いた後前方に突き出す。

V: 頭を後方に引く。

W: 足を交差させる。

X: 一步前進する。

Y: 体全体を立った状態から下方に沈ませる。

Z: 体全体を、沈んだ状態から上方に浮かせる。

a: 後方へ跳んで移動する。

b, c: 左右前方に頭を大きく突き出す。bは右側に、cは左側に。

d: 座った状態から頭だけを前方に突き出す。

e: 前方の舞手がしゃがむことにより、前半身だけが下がる。

f: 前方の舞手がしゃがんだ状態から立ち上がる。

g, h: 体を、巻き込むように捻る。gは右側に、hは左側に。

i: 足を踏み鳴らすようにして跳びまわる。

j: 立った状態で頭を上方へ持ち上げる。

k: その場で頭だけを振り回す。

l: 跳び上がる。

m, n: 頭を回すように振る。mは右側に、nは左側に。

o, p: 頭を傾けてから上方に上げる。oは右側に、pは左側に。

q: 座ったままの状態でものを後方に引く。

r, s: 左右それぞれの側からすくい上げるような動かし方で頭を下げて上げる。rは右から、sは左から。

t: 頭を、捻るように回転させる。

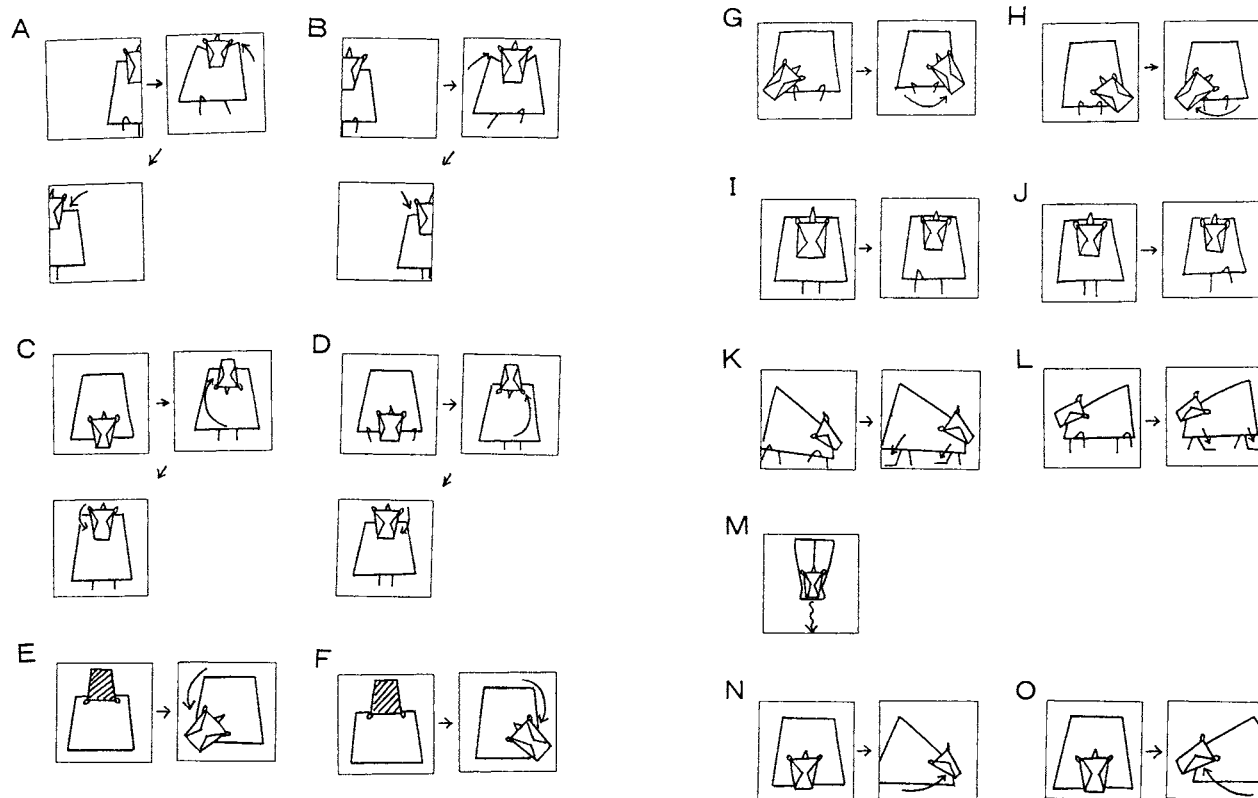


図2-1) 麒麟獅子舞における各要素動作の模式図(斜線で描いた部分は、頭の裏側を示す)

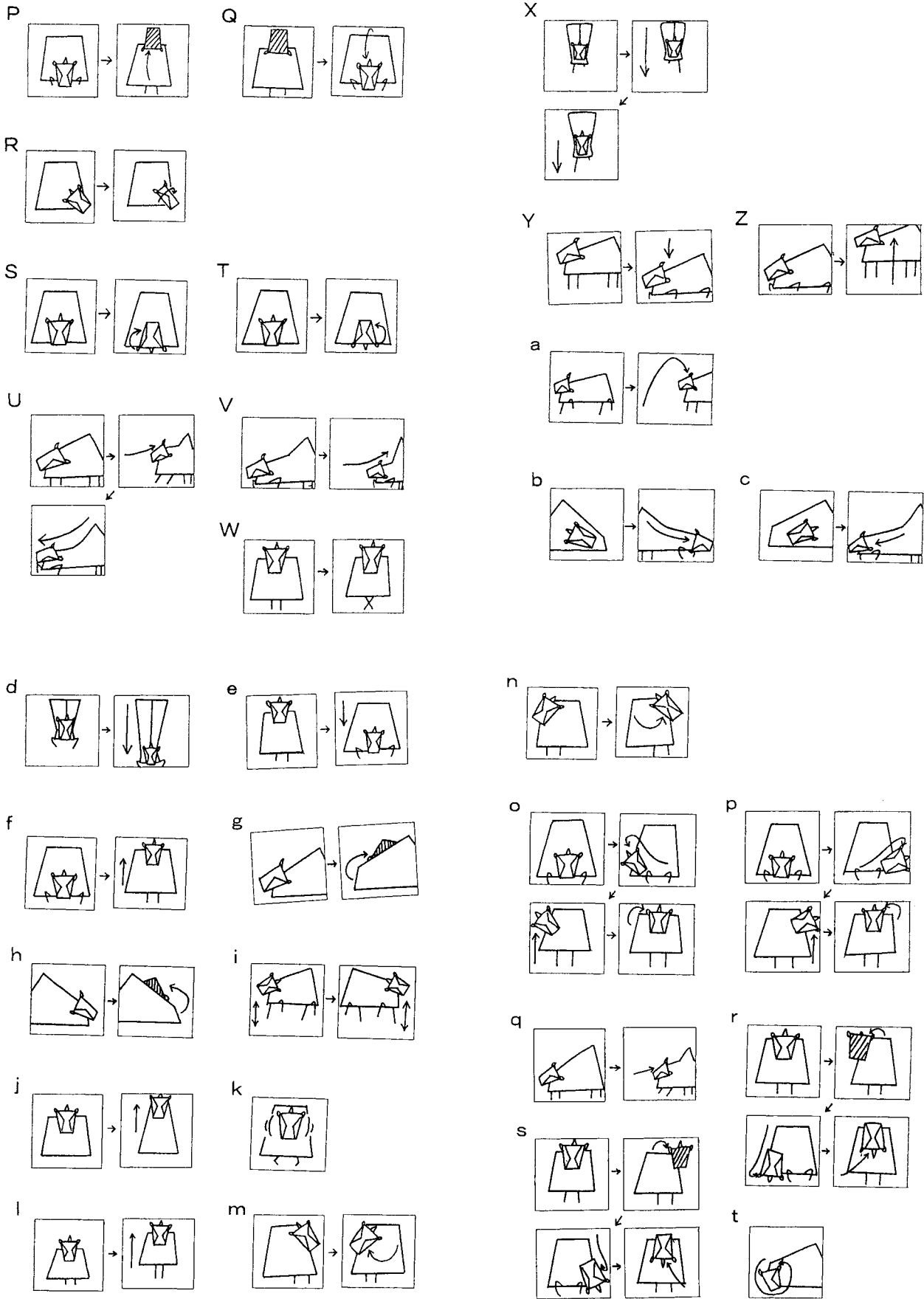


図2-(2) 麒麟獅子舞における各要素動作の模式図 (斜線で描いた部分は、頭の裏側を示す)

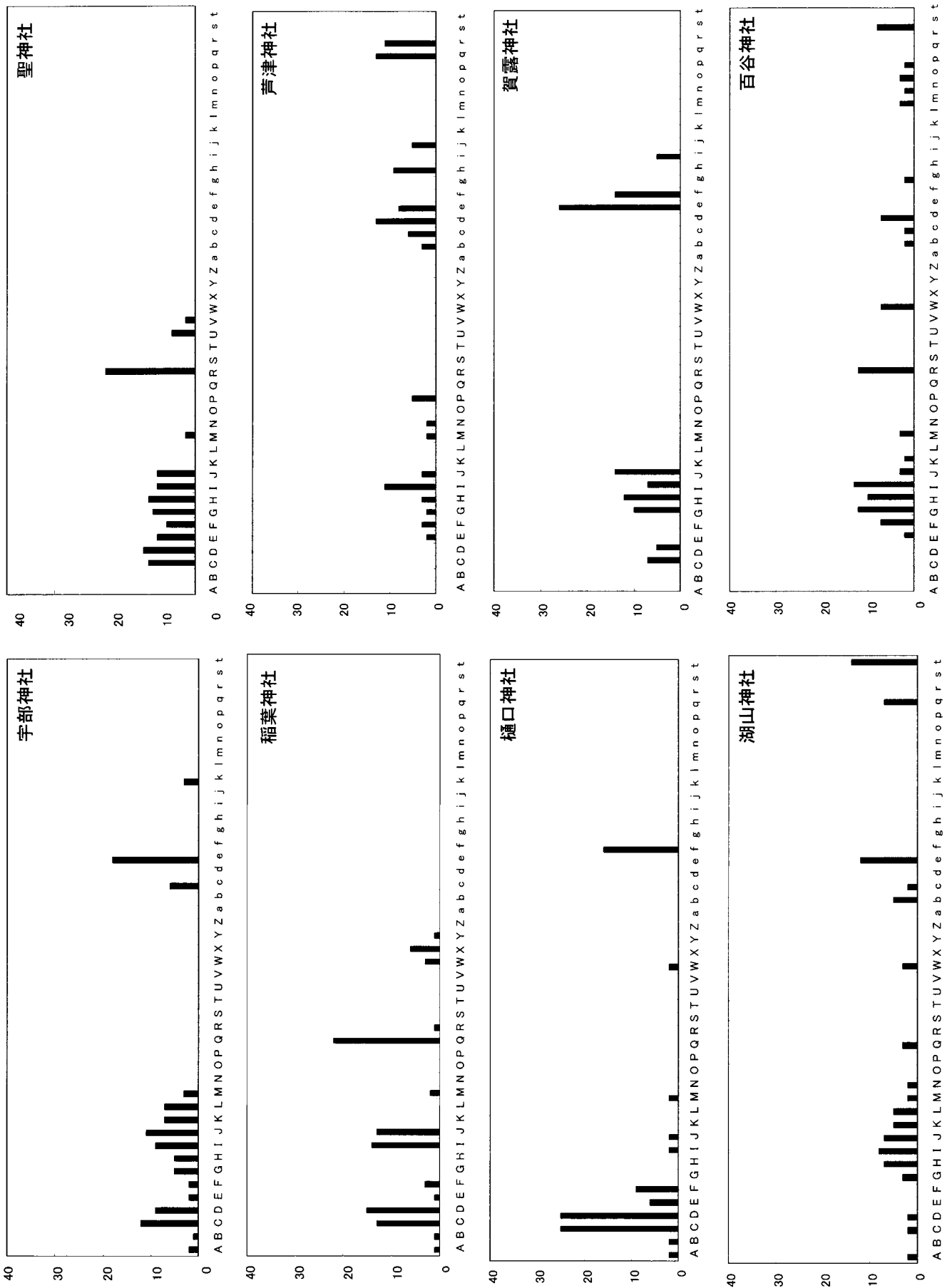


図3-1) 各地域の麒麟獅子舞における46の要素動作の頻度構成

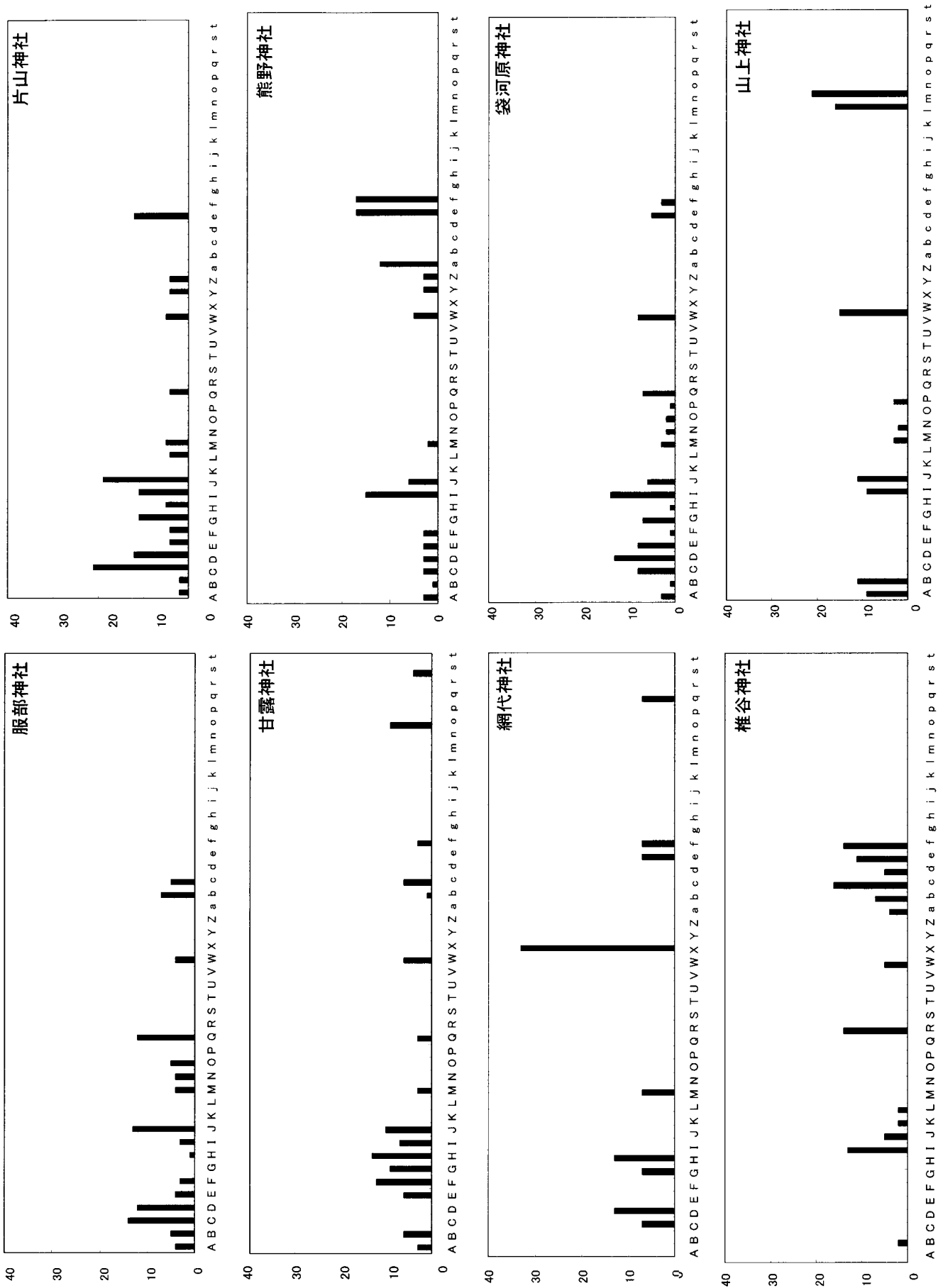


図3-(2) 各地域の麒麟獅子舞における46の要素動作の頻度構成

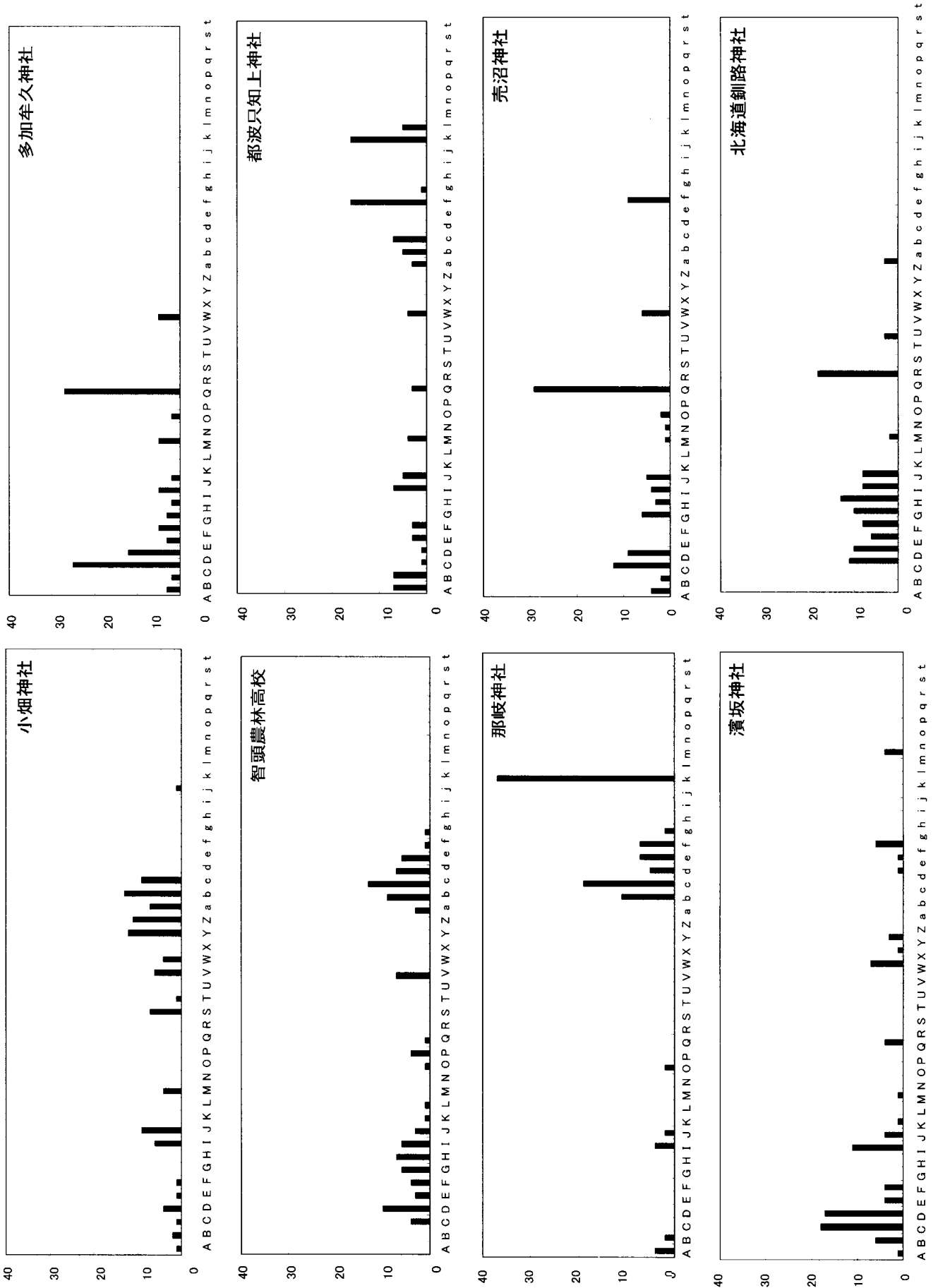


図3-3) 各地域の麒麟獅子舞における46の要素動作の頻度構成

## 2. 各々の要素動作の頻度構成

図3は各神社等の麒麟獅子舞の頻度をグラフ化したものである。各々の舞の特性を以下に記す。

- 宇倍神社：Mにより一気に前進し、その後aによって跳びながら後進するという前後移動のシンプルな舞である。eのしゃがむ動きが多い。
- 聖神社：C、Dといった基本的な動作を繰り返しつつ前後に移動する動きが多い。Rの頻度が特に多い。
- 稲葉神社：C、Dといった基本的な動作の繰り返しの多さという点では聖神社と似ているが、頭の下ろし方に関して、正面から下ろすQが多く見られる点が独自である。
- 芦津神社：C、Dといった頭を上げる動作が少ない代わりに、b、c、dといった頭を前方に突き出す動作の頻度が多い。
- 樋口神社：全体として動作の種類が少なく、C、Dといった基本的な動作の頻度が特に高い。
- 賀露神社：動きのリズムが比較的是やく、立ったりしゃがんだりといった動作の頻度が特に高い。iの動作は賀露神社でのみ見られる動作である。
- 湖山神社：b、cで前進し、K、Lで後進するという前後移動が目立つ舞である。全体として動作の種類が多い。
- 百谷神社：G、Hが非常に多く、それに連動したRも多い。m、n、o、pといった比較的珍しい頭の上げ方が現れる。
- 服部神社：C、Dの多さや、頭を正面から下ろすQの多さに関しては稲葉神社に似ている。
- 片山神社：A～Jが比較的多く聖神社に似た印象の舞である。
- 甘露神社：C、Dという頭を上げる動作はないが、代わりにoやsといった独特の頭上げ動作を行う。GやHといった頭を平行に移動する動作が多いのが特徴である。
- 熊野神社：A～Jにかけての偏りや、eが多い点など片山神社の舞に似ている印象を受ける。
- 網代神社：動作の種類が少なく、Xが30%以上をしめる、独特な舞である。
- 袋河原神社：頭上げはC、Dが多く、頭下げはEやQが多い点で稲葉神社と似た印象がある。
- 椎谷神社：頭を前方に突き出すcが特に多いのが特徴である。
- 山上神社：m、nの動作の割合が非常に多い独特の構成を持つ。

- 小畑神社：SやTといった独自の動作が比較的多く行われる。b、cによる頭の突き出しも多い。
- 多加牟久神社：C、Dを基本とする平均的な舞である。Qが多いのが特徴といえる。
- 智頭農林高校：動作の種類が比較的多く、基本的な頭上げ動作C、Dと頭突き出し動作b、cが骨格になっている。
- 都波只知上神社：頭を振るわせる動作kが多いのが特徴である。頭を突き出して前進したあと、kが現れaで跳びながら後進という場合がほとんどである。
- 那岐神社：b、cの突き出しとkの頭を震わせる動作が多く、その点では都波只知上神社の舞に似ている。
- 売沼神社：C、Dで頭を上げQで下に下ろすというパターンが比較的多く行われる。
- 濱坂神社：C、Dを基本とする平均的な舞である。動作の種類が比較的多い。
- 北海道釧路神社：聖神社の動作構成によく似ている。

## 3. 調査した舞の間の相関度およびクラスター分析

表1、図4は、各々、結果2に記した要素動作の頻度構成に基づいて計算された各舞の間の相関度、およびクラスター分析の結果を示したものである。今回、24種の麒麟獅子舞に関して、要素動作の頻度構成のみから導き出されたこれらの関係が、実際の舞相互間の分岐関係をどの程度正確に反映しているかは現時点では不明である。今回分析した場所の舞の分岐関係について推察する手がかりとしては、以下のような資料情報がある。

- (1) 「・・・岩美郡岩美町院内の熊野神社にも・・・この神社の麒麟獅子舞も、聖神社（鳥取市行徳）の系統であると伝えられている（野津 1990）。」
- (2) 「・・・（智頭農林高校の麒麟獅子舞が）指導を受けたのは智頭町那岐地域の麒麟獅子舞と、芦津地域の麒麟獅子舞であるが・・・（第17回国民文化祭郡家町実行委員会 2002）。」

今回の分析で得られた熊野神社麒麟獅子舞と聖神社麒麟獅子舞の相関は、0.474、智頭農林高校麒麟獅子舞と那岐神社麒麟獅子舞、芦津神社麒麟獅子舞との相関は、それぞれ0.389、0.451である。これらの相関値が特に高いかどうかについては、資料数が少ないこともあり客観的に判断することはできないが、今回の24種の舞すべての間の相関値（276個）の平均値が0.230（標準偏差=0.243）であることを考えると、少なくとも比較的高いということ是可以する。クラスター分析の結



表 1 麒麟獅子舞の要素動作の頻度構成に基づいた舞相互間の相関

	宇倍	聖	稲葉	芦津	樋口	賀露	湖山	百谷	服部	片山	甘露	熊野	網代	袋河原	椎谷	山上	小畑	多加牟久	智頭農林	都波只知上	那岐	売沼	濱坂	北海道釧路
宇倍	0.491																							
聖	0.73	0.347																						
稲葉	0.098	-0.24	0.478																					
芦津	0.563	0.202	-0.138	0.27																				
樋口	0.432	0.288	0.201	0.183	0.27																			
賀露	0.303	0.109	0.201	0.28	-0.047	0.517																		
湖山	0.3	0.584	0.086	0.196	-0.084	0.174	0.146																	
百谷	0.63	0.348	0.786	-0.093	-0.576	0.172	0.163	-0.064																
服部	0.744	0.539	0.64	0.067	-0.55	0.629	0.403	0.218	0.663															
片山	0.329	0.369	0.194	0.057	0.062	0.298	0.184	0.589	0.247	0.355														
甘露	0.56	0.474	0.403	0.248	0.386	0.732	0.553	0.175	0.384	0.806	0.174													
熊野	0.173	0.158	0.223	-0.008	0.285	0.293	0.115	0.012	0.076	0.214	0.055	0.213												
網代	0.474	0.086	0.213	0.17	0.298	0.668	0.137	0.094	0.077	0.403	0.152	0.475	0.088											
袋河原	0.212	0.234	0.071	0.279	0.064	0.409	0.266	0.344	0.06	0.126	0.15	0.259	-0.039	0.591										
椎谷	0.208	-0.042	0.123	0.083	-0.062	0.005	0.04	0.168	0.151	0.145	0.184	0.027	-0.147	0.118	0.058									
山上	0.092	-0.007	0.127	0.025	-0.011	-0.26	0.051	-0.039	0.267	0.205	0.08	-0.001	-0.139	0.195	0.265	0.054								
多加牟久	0.607	0.31	0.824	0.123	0.575	0.1	0.075	-0.006	0.766	0.565	0.121	0.307	0.131	0.051	-0.104	-0.005	-0.047							
智頭農林	0.399	0.328	0.242	0.451	0.311	0.369	0.294	0.301	0.385	0.337	0.387	0.458	0.169	0.215	0.471	-0.146	0.325	0.182						
都波只知上	0.194	0.058	0.117	0.067	0.228	0.159	-0.03	-0.029	0.186	0.04	0.226	0.021	-0.056	0.424	0.426	0.144	0.139	0.049	0.116					
那岐	0.064	-0.14	0.089	0.088	0.043	0.076	0.031	0.066	0.022	-0.075	-0.006	0.094	-0.077	0.089	0.34	-0.069	0.136	-0.113	0.389	0.703				
売沼	0.677	0.188	0.797	0.143	0.413	0.21	0.109	0.01	0.667	0.428	0.177	0.185	0.115	0.16	0.035	0.043	-0.06	0.874	0.127	0.209	-0.066			
濱坂	0.775	0.439	0.701	0.044	0.857	0.257	0.088	0.082	0.677	0.687	0.143	0.483	0.215	0.363	0.132	0.207	0.107	0.671	0.316	0.207	-0.074	0.515		
北海道釧路	0.463	0.977	0.364	-0.012	0.42	0.325	0.137	0.623	0.34	0.559	0.44	0.391	0.213	0.121	0.222	-0.046	0.324	0.324	0.367	-0.05	-0.141	0.199	0.427	

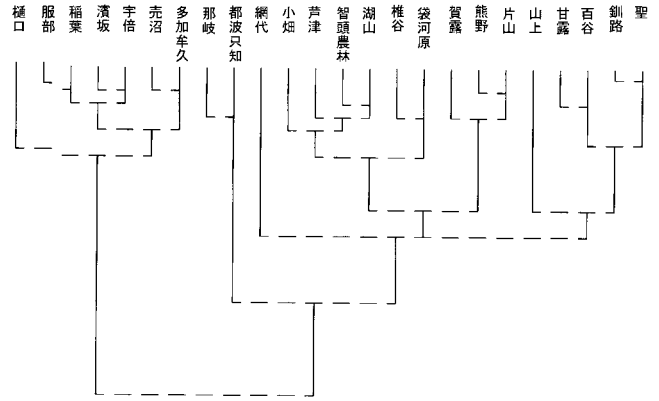


図 4 要素動作の頻度構成に基づくクラスター分析によって描かれた系統樹

果も、熊野神社麒麟獅子舞と聖神社麒麟獅子舞の2種、また、智頭農林高校麒麟獅子舞、那岐神社麒麟獅子舞、芦津神社麒麟獅子舞の3種は、比較的近いクラスター内に入っており、資料情報の内容と分析の結果が、少なくとも大きくずれてはいないことを示唆している。今回の分析結果で特に興味深いと思われる知見として、聖神社麒麟獅子舞と北海道釧路神社麒麟獅子舞に見られた非常に高い相関(0.977)があげられる。北海道釧路への麒麟獅子舞の伝承については、明治17、18年に鳥取県東部から釧路に開拓移民として移住した士族が伝えたことが知られている(野津 2002a, 鳥取市歴史博物館 2003)。今回の分析結果が実際の麒麟獅子舞の分岐関係を反映しているとすれば、北海道釧路の麒麟獅子舞は聖神社の舞を手本として継承されたと推察される。望郷の心理が、麒麟獅子舞という文化作品の変化に大きな影響を与え、舞の形態の忠実な伝承を生じさせたのではないだろうか。

4. 麒麟獅子舞研究への自然科学的手法適用の有用性

今回の試みは、麒麟獅子舞研究への自然科学的手法適用の有用性の可能性を示している。ただし、より詳細な評価は、以下のような修正も加えた上での、本格的な作業を経た後、改めて行われるべきだと思われる。

- (1) 今回、抽出・分類した46の要素動作が適切であるかどうか、追加や統合も念頭に入れながら検討する必要がある。野津(1990)は、本舞における麒麟獅子の動作として、「練り込み」、「小脚」、「腹匍」、「カンヌキ」、「背切り」、「脛折り」などをあげている。これらの動作との対応についても考慮しなければならない。また、各要素動作の出現の順序や出現の組み合わせ等も正確な分析には必要だと思われる。さらに、同一カテゴリーに分類された動作についても、神社によってパターンの変化が起こっている場

- 合もある。そのような動作の比較を定量的に行う工夫も必要である。
- (2) 麒麟獅子の舞動作以外の情報として、獅子頭や衣装(蚊張)の形態、猩々の動作や面などの形態も可能な範囲で分析に利用すべきである。
- (3) 麒麟獅子舞の伝承経路について、地元関係者への聞き取りや文献調査による情報収集が必要であることはいうまでもない。

## 謝 辞

本研究の実施に際しましては鳥取大学名誉教授の野津龍先生より貴重なアドバイスを頂いた。お礼申し上げます。

## 引用文献

- Barbrook, A. C., Howe, C. J., Blake, N. and Robinson, P. (1998) The phylogeny of the Cantarbury tales. *Nature* 394: 839.
- Bennett C. B., Li M. and Ma B. (2003) Chain letters and evolutionary histories. *Scientific American* June 2003: 65-67.
- 第17回国民文化祭郡家町実行委員会 (2002) 第17回国民文化祭・とっとり2002 民俗芸能祭 アジア獅子舞大会解説プログラム, 5 pp.
- 小林朋道 (1999) 通勤電車の人間行動学. 創流出版社, 295 pp.
- 野津龍 (1990) 因幡の麒麟獅子舞 (I). 鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学 41巻1号: 1-18.
- 野津龍 (1991) 因幡の麒麟獅子舞 (II). 鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学 42巻1号: 1-17.
- 野津龍 (2002a) 日本の獅子舞 (I). 第17回国民文化祭・とっとり2002 アジア獅子舞大会. 郡家町実行委員会, 59 pp.
- 野津龍 (監修) (2002b) 獅子の文化と因幡の麒麟獅子舞. 第17回国民文化祭鳥取県・郡家町実行委員会, 15 pp.
- 眞岡哲夫 (2004) 茶道所作の系統進化. 遺伝 58巻5号: 98-103.
- 鳥取市歴史博物館 (2003) 鳥取市・釧路市姉妹都市40周年記念企画 移住と移民の歴史展・北海道一故郷鳥取からの旅立ち, 58 pp.